

■初めから漢字で教へて見た

長い間さう考へてゐた私は、初めて文字といふものを学習する一年生に対して、初めから社会で使はれてゐる表記で教へて行きました。それですから、

えんそく
あるけ、
あるけ、
げんきにあるけ。

といふ文章は、

遠 足
歩け、
歩け、
元気に歩け。

といふ表記に改めて教へたわけです・“遠足”といふ表記で学習させますと、やがて“足”や“遠い”といふ表記を学習することにより“遠足”と

いふ言葉の真義がひとりでに理解できるやうになります。勿論、初めから「遠は“遠い”、足は“あし”で、遠い所へ足を使って行くこと」といふ説明をすることも出来ます。これは“えんそく”といふ表記ではとても出来ません。

さて、このやうに漢字かな混り文に改めたものを読ませますと、初めからとても一年生とは思へないやうな実に見事な読み方をします。それは一語一語を瞬間的に目で読み取った上で読むので、速くすらすらと読めるのだらうと思はれました。

そのうちに意外な事に気が付きました。“け”や“に”といふかな文字だけを取り出して読ませてみますと、読めない子供がゐるのです。そこで、一学期の終りに、学習させた漢字やかなの読み方調査をしてみました。すると、漢字はよく読めるのに、かなは殆ど読めない、といふ子供が何人もゐたのです。

然し、この子供たちも、文章を読ませてみますと、実にすらすらと読むのです。それは読める漢字を頼りにして読めないかなを適当に読んでゐるのに違ひない、と思はれました。つまり、“漢字さへ読めれば、かなは読めなくても、文章は読めるものだ”といふことです。我々が新聞を読む時にしてゐる事を、一年生でもしてゐるといふわけです。

然し、かなも一字一字読めるやうにしなければいけないと思ひ、この子供たちを放課後に居残らせ、かなの特訓をしてやりました。けれども

一向に効果が現れないので、中止してしまひました。結局はそれが良かったのです。三学期を終る頃には、すべてのかなが立派に読み書き出来るやうになってゐました。

かなの学習は全く抽象的な音声と特徴の少ない字形を結び着ける事ですが、これが実に結び着き難く、それで非常に覚え難いものなのです。だから、特訓した所でなかなか覚えられるものでは無いのです。それよりも、長い目で見てやって、「ひとりでに覚えるまで気長に待つてやる」といふ態度が大切です。特別に努力して学習しなくても、一年といふ年月の間には、かなはひとりでに覚えられるものである、といふ事が判りました。